

## 哲学対話と各種学習理論との親和性について

### About between “Philosophical dialogue” and “Learning theory”

藤平 昌寿\*1

Masatoshi FUJIHIRA\*1

\*1 武蔵野大学

\*1 Musashino University

Email: mail@fujipon.com

あらまし：前稿まで、哲学対話に関する発表を行ってきた。本稿では、哲学対話の評価方法を模索する中、エンゲストロームやガーゲンらによる3つの理論と哲学対話との親和性について考えていきたい。

キーワード：対話、協調学習、評価、拡張的学習、関係に基づく評価

#### 1. はじめに

筆者はこれまでの本大会において、対話 (dialogue) に関するプレカンファレンス・企画セッションに参加、直近の大会では、哲学対話の実践や SEL・探究学習との関連などについて述べてきた。本稿では、エンゲストロームの学習理論やガーゲンの関係に基づく評価などの理論・評価と哲学対話との関連について考えていきたい。

哲学対話については以前の拙稿<sup>(1)(2)</sup>でも触れているので、ここでは省略するが、哲学対話を行う際のルールとして以下の項目を予め提示している。

1. 何を言っても良い
2. 他人を否定しない、茶化さない
3. ただ聞いているだけでも良い
4. お互いに問いかけてみる
5. 知識ではなく、自分の経験で話す
6. 結論が出なくても、意見が変わっても OK!
7. 分からなくなってもいい
8. 参加者は全員平等
9. 小学生にも分かる言葉で話す
10. 話せる人は一人ずつ

#### 2. エンゲストロームの活動理論と哲学対話

エンゲストローム(1987)<sup>(3)</sup>による拡張的活動理論では、6つの要素を三角モデルとして配置し、その相互関係から成果が導かれるとしている(図1)。

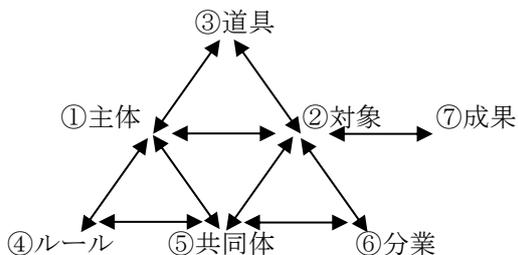


図1 拡張的活動理論モデル  
(エンゲストローム)

これを哲学対話のスキームに当てはめると、図2

のようになり、エンゲストロームの枠組みと親和性が高いことが伺える。

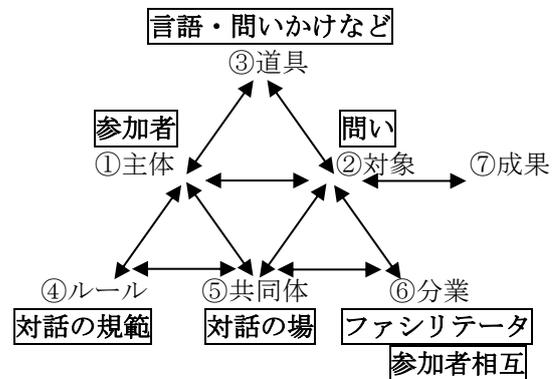


図2 拡張的活動理論と哲学対話の関係性  
(図1を基に筆者加筆)

①主体 (Subject)：哲学対話では参加者一人ひとりが思考と発話を通じて探究の主体となる。

②対象 (Object)：哲学的な問い「幸福とは何か」「自由とは何か」など、意味の生成対象。

③道具 (Mediating Artifacts)：対話やメタ的思考、例え話などが媒介となる。

④ルール (Rules)：対話を安全で意味あるものとするための社会的ルール。

⑤共同体 (Community)：「共に考える」場の文化的・社会的背景が影響する。

⑥分業 (Division of Labor)：ファシリテータと参加者の役割。

またエンゲストロームは、これらの構成要素間で起こる矛盾—異なる意見や価値観の衝突、多様な視点の中で生じる葛藤など—が思考の深化を促すとしており、哲学対話ルール6や7との親和性も示唆している。

#### 3. エンゲストロームの拡張的学習と哲学対話

エンゲストロームは拡張的学習理論も提唱しており、以下の7段階を経て、既存の活動システムを再

構築していくプロセスを重視している。

1. 疑問化 (Questioning)
2. 矛盾の分析 (Analysis)
3. 新たな解決策のモデル化 (Modeling the new solution)
4. 新モデルの試行 (Examining the new model)
5. 新モデルの実践 (Implementing the new model)
6. プロセスの省察 (Reflecting on the process)
7. 実践の確立・一般化 (Consolidating the new practice)

これらの段階の中で特に、疑問化・分析・省察といったフェーズでは、哲学対話の手法がより有効的に利用できると考えられる。また、拡張的学習が実践的・構造的変革を目指す枠組みであるのに対し、哲学対話は認知的・意味的変革を支える方法として機能するとも捉えられ、哲学対話を通じ、「そもそもなぜこの問題が問題なのか？」を探ることにより、拡張的学習の初期フェーズをより深く、内行的に行える可能性も存在するなど、相互補完的な関係にある。

#### 4. ガーゲンの関係に基づく評価と哲学対話

ガーゲンら(2022)<sup>(4)</sup>は、従来の一斉テスト型による教育的評価を「工場モデル」と表し、学びに携わる人々の「関係に基づく評価」を提唱している。

ガーゲンは、「自己」や「価値」などの概念は、人と人との相互作用の中で形成されると考え、評価は関係性の中で生成される社会的なプロセスだとしている。つまり、誰が誰をどういう場面で評価するかによってその意味は変わる、ということである。ここでの評価は固定的ではなく流動的であり、文化的・社会的文脈に依存することとなる。また、評価は「正しさ」よりも、「その関係の中でどんな意味を共有できるか」が重視される。

これらのことから、哲学対話との親和性が高いことが伺えるが、もう少し深めていく。

1. 対話を通じた意味の生成  
ガーゲンは、評価や真理は対話の中で生成され、評価とは個人を裁くものではなく、関係をつなぐ行為であるとし、哲学対話も、答えや意味はあらかじめ与えられたものではなく、対話の中で参加者によって共に探求・構築されるものとするなど、両者とも「意味は対話の中でつくられる」という社会構成主義的な立場を取っている。
2. 一方的な評価ではなく探求  
ガーゲンは、権力関係に基づく一方的な評価を問題視し、評価とは対等な対話を通じて再構成されるべきであり、対話のきっかけとしての意味生成のプロセスと捉えている。哲学

対話も優劣や正解を決めるのではなく、問い続ける態度を評価する。これらのことから、評価や知識を固定したものではなく、「問いを深める関係性の生成」とする点で共通している。

3. 自己の再構築  
ガーゲンは「自己とは関係性の網の中にある存在」と述べ、哲学対話でも他者との対話を通して自分の考えを深め、「自分自身とは何か」を問い直すプロセスが中心であり、自己を「内面」ではなく「関係の中で変容するもの」としてとらえる点で共鳴する。

これらのことから、関係に基づく評価によって哲学対話の効果を述べられる可能性が高まるであろう。

#### 5. まとめ

エンゲストローム・ガーゲンらの3つの理論と哲学対話との親和性について考察した。

これらの理論はプロセスの中に心理的安全性を担保する仕組みも含まれており、より哲学対話との親和性も高まることに気づいた。

各種学習理論と哲学対話の親和性については、今後も継続的に探っていきたい。

#### 参考文献

- (1) 藤平昌寿：対話型コミュニケーションにおける意識変化の調査手法に関する考察2, 教育システム情報学会第44回全国大会発表論文集, pp.197-198, 2019
- (2) 藤平昌寿：オンライン・オフライン哲学対話の実践報告, 教育システム情報学会第46回全国大会発表論文集, pp.51-52, 2021
- (3) Engeström, Y. (1987). Learning by Expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research.
- (4) ケネス・J・ガーゲン, シェルト・R・ギル：何のためのテスト？評価で変わる学校と学び, ナカニシヤ出版, 2022